

たが、今日一日の仕事で大層疲れました、どうぞ、もう一晩泊めて下さい」と願ひました、婆さんは頑固になか／＼聞入れませんでした、兵士が折入つて頼みましたので、それなら又明日は澤山薪を伐つて呉れたらといふ約束で、漸やく納得して呉れました。

翌朝につて、又この正直な兵士は薪を澤山に伐つてやりました、然し其の日は未だ夕方に間もありましたが、何分前の日からの働きついで、身体が綿のやうに疲れましたからまた今晚も泊めて下さいと頼みました、婆さんは昨日のやうに、なか／＼聞入れて呉れませんでした、明日は婆さんの爲めに、井戸の底に燃えて居る、青い光を取つて上げやうといふ約束で、やつこのことで又承知して呉れました。

間もなく夜が明けますと、婆さんは昨晩の約束だからと、兵士をつれて裏の深い井戸の所までまゐりまして、長い／＼縄で兵士の腰を縛り、井戸の中へづるづると

引下げました。

婆さんに長い縄で縛られ、深い井戸へ引下げられた兵士は、やがて底に足が届きますと、成程婆さんが言つた通り、青い火がちよろ／＼と燃えて居ますから、早速手に其を取つて引上げて呉れと相圖をいたしました。

もと／＼善くない魔法使ひの婆さんですから、青い光を取つて来て呉れた兵士を、井戸の口元まで引き上げた時手を出して、『消ねるといけないから、私に其の光りを早くお渡しよ』と申しました、そして心の内では、自分の欲しい光が手に入つたら、再び兵士を井戸の底へ引下げて、殺してしまふ心算で御座いました、しかしこの兵士はなか／＼伶俐ですからウカと其の手にはのりません、『今上げますよ、私がスツカリ井戸の外へ出たら上げますよ』と聞入れませんでした。

案に相違せず、婆さんは心の底まで見透かされたと思ひましたので、火のやうに怒りまして、青い光を手についた儘の兵士を、再び井戸の底へ引下げました。

氣の毒なこの兵士は、太陽の光も見ぬ井戸の底の、ジク／＼した泥の内にピタリと横になつて、もう二度と生きて出られぬ不仕合せを嘆いて居ましたが、別にいゝ考も無論御座いません、衣囊の内から吸ひ残してあつた烟草を取り出して、『せめてはこの世のお仕舞ひに、烟草なりと吹かして死にませう』と手にした青い光で吸ひ付け、さもお旨しさに、スツバ／＼と吸つて居ました。

烟草を吸つては、フットその煙を上の方に吹ひて居ますと、不思議／＼、煙の中からヒョッコリと、一人の小さい一寸法師が現はれてまゐりまして、『足下、私に何か御用はありませんか』と、小さい聲で尋ねました、あまりの不思議に、兵士は一時ビクツと驚きましたが、氣の強い人で御座いましたから、すぐと平氣な顔で、『お前なんぞに、何んにも用はないよ』と、再び烟草を吹かして居ました。

けれど一寸法師は立ち去りません、『足下、何んにも御遠慮はいりませんよ、私は足下を青い光の王様といたしましたして、どんな御用でも厭ひません、先づ手始めに井

戸の底から御救ひいたしませう』と、いふより早く兵士の手を握りました、手を握られて兵士は、いふが儘にして起き上りますと、豆のやうに小さい身體に、どうして恐ろしい力がありますのやら、一寸法師はフワ／＼と身を浮かせて青い火を手に持つ儘の兵士を、難なく井戸の外へ引摺り出しました。

不思議の助けで、再びこの世の人となりました兵士は、『どうも有難う、もう一度御苦勞だが一骨折つて、あの魔法使ひの婆さんを、私の代りに井戸の底へ投げ込んではくれまいか』と相談しますと、一寸法師は譯もなく承知して呉れまして、どうして婆さんをつれ出したものか、難なく井戸の中へ投げ込みました。

手輕に敵を打つた兵士は、喜び勇んで一寸法師と共に、婆さんの小屋に踏み込んで、澤山に貯へてあつたお錢を残らず奪ひ出しました、其の時一寸法師は兵士に向ひ、『足下、これからでも、私に何か御用がありましたら、其の青い光で烟草を吸ひつけて下さい、さうして下さいますれば、キツト何處へでもまゐりますから』と、

いふかと思へばフツト消れてなくなりました。
 急にお金持になつた兵士は、大威張でそこを出立しまして、次の夜は一番賑かな町の一、番上等の旅館の、一番美しい部屋へ宿を取りまして、お旨しい物や、直の高に着物などを誂へて大層得意になり、そして何を思つたか再び烟草を取り出し、例の青い火で吸ひつけますと、その煙の消ぬ間に一寸法師がヒヨコリとまゐりました、兵士は、「王様は私に一文の給金も呉れずに酷い目に遇はせたから、一番儲を打たねばならん、お前御苦勞だが、今晚御殿に潜び込んで御姫様を奪つて来て呉れ、さぞ王様が驚ろくことであらうから」と頼みますと、一寸法師は、「それはなかく、浮雲い大仕事です」とは申しましたが、程なくよく寐んで居らつしやるお姫様を、窃と眼を覺まさせんやうに、兵士の所まで奪つてまゐりました。
 翌朝まだ暗い内に、一寸法師はまたお姫さまの眼の覺ぬやうに、窃と御殿のお寢間の中へつれてまゐりましたから、お姫さまは何處へ連れて行かれたことやら御

存知御座いませぬ、程なくお目醒になりましたして王様に、「お父さま、私は昨夜不思議な夢のやうな、夢でないやうな目に遇ひました、私の身體がスウツと空を飛んで、お父さまが先日お暇をお出しになりました、彼の兵士の宅にまゐりまして、下女同様に酷使はれました」と仰せられますと、王様はお驚きになつたのみか、大層御心配になつて、「今夜もまたそんな事があつてはならぬから、お前の衣囊に小さな孔をあけて、豌豆を一ぱい入れてお置きなさい、さうすればお前が何物かに連れられて、宙を飛んで行くとき翻れるに相違ない、その翻れた豆の跡をつけて捜して行けば、お前がつれて行かれる家を見附け出す何よりの手掛りになる」と、お吩咐けになりました、お姫さまは成程と思召しめして、お父さまの仰せの通りに、晝間のうちから御用意なさいました、例の影も形も見ぬ一寸法師は、何處にどうして隠れて居ましたことか、お二人の相談をスツカリ聞込みました。
 やがて其の日も夜になりますと、旅館の一室に居た兵士は、又一寸法師に今夜

もお姫さまをつれて来いと命しました、一寸法師は晝間王様の謀計を立聞きして居ますので、御殿からお姫さまをつれたす前に、澤山の豌豆を町中に撒きちらして置き、ましたから、御姫さまの衣囊から、少しばかりの豌豆が灑れましたとて、何のわかる道理が御座いませう、唯翌朝になつて町の人々が、これは何處から降つて来たのか、素敵に澤山の豆があると、大よろこびで拾ひましたのみで、折角の王様の謀計は、何の役にも立ちませんでした。

王様は折角の謀計がフイになりましたので、大層お落膽で御座いましたが、今度はお姫さまに、『今夜また伴れて行かれたら、ソツとお前の靴を脱いで、その部屋に残しておいでなさい』と仰せられました、また例の一寸法師に立聞かれてしまひました。

三日目の夜も兵士は、またお姫さまを伴れて来いと一寸法師に申しますと、晝間の靴の謀計を存じて居ます一寸法師は、頭を左右に振りまして、『足下、今夜はあぶ

ない、下手をすると捉へられますよ』と注意しましたが兵士は一向聞入れません、一寸法師は止むを得ず、『それなら致し方も御座いません、たゞ充分に御注意下さいませ、そして翌朝未だ町の者が寝てゐる内に、早く逃げておしまひなさい』と親切に申しまして、其の夜もお姫さまを窃と伴れてまゐりました。

お姫さまも其の夜はお父さまの仰せのやうに、御自分の靴を脱いでソツト兵士の部屋に秘してお歸りになりました、そしてお父さまにお告げになりました、そこで王様は急に多くの兵士を八方にお配りになり、お姫さまの靴の置いてある家をお捜させになつから堪りません、到頭兵士は宿を見附けられて仕舞ひました。

兵士はそれより前に、一寸法師に教はつたやうに町の外へと逃げましたが、逃げやうが少し遅かつたばかりに、王様の兵士に捕へられ、それは、く嚴重な牢屋へ入れられましたのみならず、太い鎖でぐるぐると捲きにされました、まだそれ許りでなく大の失錯には、今朝逃げる時に餘り急いだので、生命から二番目に大切な例の

青い光と、お鏡を澤山に入れて置いて置いた財布とをスツカリ忘れて、衣囊の中には一文の貨幣が有るのみで御座いました。

落膽して元氣なく、悄然と牢屋の内に居ました兵士は、或る日のこと窓の外を、自分の昔のお友達を通るのを見ましたから、早速呼び寄せて、「君、すまないが私の居た旅館へ行つて、残して来た小荷物を取て来て呉れませんか、御禮にはこの貨幣を一枚差上げますが」と、哀れつぽく頼みますと、旨い儲仕事と喜んだ其の友達は、急いで例の青い光と財布とを取つて来て呉れました。

兵士は占めた舌鼓を打ちまして、早速青い光で烟草の煙を出して、一寸法師を呼び寄せました、一寸法師は兵士を慰めて、「御心配なさいますな、私が居ればどんな事があればとて大丈夫ですよ、唯青い光をなくせぬやうに御注意下さい」とその儘消れて行きました。

到頭この兵士は罪に問はれて、絞架の上で殺されることに極まりました、けれど

も兵士は、一寸法師のいつた言葉が御座いますから、少しも恐れませんが、どうかこの世のお別れに烟草を一服吸はして下さいと、頻に願ひましたので、王様も別に子細もないこと、早速お許可になりましたので、仕すました兵士は例の手段で、一寸法師を呼び寄せ、「お前其處らの奴等を殺すなり追ひ散らすなり、好きなやうにして呉れ、そして王様も斬り捨て、呉れ」と頼みましたから堪りません、一寸法師は颯風の如く飛び廻り、あはや塵にせうといたしましたから、王様は驚いて兵士の生命を赦すのみならず、お姫さまと結婚の式を擧げさせ、王様がお崩御になつた後は、次の王様にするといふ約束をいたし、漸やく大事に至らずして事がすみました。

〔解説〕永年の間使つた兵士を、一文の給料も與へんでお暇を出した王様が、御自身のお姫様のことで大層御心配をなされ、兵士の生命をなくせうとした魔法使ひの婆さんが、井戸の底で死ぬといふのも、皆悪いことこの報であります、悪い種

子を蒔いて、善い果實を得やうといたしますのが無理なやうに、この世を無事に暮さうと思ひましたら、常日頃から善い心掛けが、何よりの肝腎です。

一三三 藁と薪と蠶豆

或る田舎の婆さんが、蠶豆を煮て食べようと思ひました。婆さんは大きな鍋へ蠶豆を澤山入れて竈にかけ、薪と藁とを突込んで、今しも火をつけやうと致しました途端に、一粒の蠶豆が、素早く鍋から飛び出し、一本の薪と藁はコツソリと竈から抜け出して、三つとも生命からく、臺所から外へ逃げだしました。

可なり遠く迄逃げ延びました時、藁が先づ胸撫で下して、『あゝ、危なかつた、時に友達、君達是一体どうして逃げなかつた』と、尋ねますと、薪もホツと氣息を吐いて、『イヤ、僕はね、唯もう無我無中で逃げだして、仕合に諸君と此處まで來

れたが、もう一足遅かつたら、今頃はとうに灰になつて居るところだつた』と喜びますと、蠶豆もまた、『イヤ、僕もほんとに酷い目に遇ふところだつた、慙然に、同じ畑で育つた友達等は、定めし今頃婆さんの夕飯のお菜になつて、齒もない齧で喰ひ潰されてるだらうよ』とお友達のはかない最後に引較べて、自分の仕合せを喜びました、藁は二人の話をきいて、『君達も運善く逃げ、僕もまあ仕合せよく、此處までお供は出來たもの、仲間の事が思はれて不憫でならないよ、婆さんが皺だらけの手で、仲間を澤山ムズと掴んで、頸も腕も折れる程無理に曲げ、竈の中へ振込んだが、僕一人こうして助かるとは、本當にまあ夢のやうだよ』と、今更のやうに運命の計り難いを思ひました。

時に薪が、『身の上話もこれで切上げて、僕等三人はこれからどうしやう』と相談しますと、蠶豆は子細らしい顔をして、『言はなくても分つて居るよ、お互ひに生命拾ひをして、やつと此處まで逃げた三人だもの、これから先きは仲善く兄弟のやうに暮

さうじやないか、さあ大慨疲勞はぬけたらう、ポツ／＼行かじやないか、なんにし
ても、人目にかゝつたら又一大事だ、少しも早い得策だよ」と。
藁も薪も、蠶豆の申すのを實にもと思ひ、少しも早く何處か遠方の、危げのない山
の中で楽しく暮らさうと心を極め、打そろつて旅に出ました。

三人は程なく、唯ある小さい谷川の邊に出ましたが、橋が一つも架つて居りませ
ん、ハテどうして渡つたものと、互ひに顔を見合せて思案にくれてゐると、一番丈
の高い藁が、善い智恵を絞り出して申しますには、「僕が向ふ岸に手を伸して、横た
ふしになつて橋の代理を勤めるから、君等二人は其の上を渡ればいゝ」と申しまし
た。

そこで、藁はウンと向ふ岸まで、身體を出来るだけ伸して居ますと、先づ薪が威
勢よく、藁の上を滑り始めましたが、あんまり機勢がつき過ぎて滑りましたから、橋
の中頃まで渡つたと思ふ時分にポツと火が出て、二人は「執つ」と唯一聲放したのみ

で、谷川の中へチエウツ、ブスリと沈んでしまひました、蠶豆はこちらの岸からそ
れを見て、「阿陀佛、阿陀佛」

〔解説〕善いと思へば悪い事が來ますし、悪いと思へば善い事にぶつかる、偕世の中
は幸と不幸の入れ交せで、よいことがあつても毫しも油断は出來ませぬ如く、
悪いことがあつても毫しも落膽すことはありません、唯自分の悉皆の力を出
して、何時までも志を變へず、其の上は天命を待つより他にありません。

二四 老 犬

ある牧羊者が、一疋の忠義な犬を飼つて居ましたが、追々年をとつて、齒がみん
な抜けてしまひました。

或る日牧羊者は、妻に向つて、「明朝は家の犬を屠殺つてしまはうよ、もう飼つて
おいても役に立たんのだもの」と申しますと、妻は驚ろいて、「だつて貴方、あの犬

は今迄よく仕へましたんですもの、今更役に立たないといつて、殺すのは餘り慾然ですよ、死ぬまでよくしてやるのが當然ですよ、何卒もう、そんな殺すなんて酷い事をいつて下さいませよ」と、自分の事を頼むやうに申しました、けれども牧羊者はなかく聞入れません、「お前はそんなにいふけれど、もうあの犬は齒もないんだせ、それで盜棒が入たり、羊を喰はうと思つて狼などが來ても、何んの役に立つんだい、そりやお前のいふ通り、今迄長年よく仕へたよ、けれど又役に立たなくなつてからも、随分彼奴の面倒を見てやつたせ、だからお前が何と言つても、明日は屠殺する事とするよ」と、云ひ張りますから、妻もその儘に黙つてしまひました。今迄主人夫婦の側で、ジツと話を聽いて居ました老犬は、明朝は自分の生命が亡くなる時かと喫驚しましたが、別に能い分別も出ません、仕方がないので日の暮れるのを待つて、程近き森に住む親しい狼の所へ行き、身に降りかゝつた災難を打明けて、其の考を借りました。

一伍一什をきいた狼は、事もなげに呵々と笑ひ、「お前でもない、そんなに心配するにや當らないぢやないか、私が能い智慧をつけて上げるよ、知つての通り、お前の所の夫婦は、毎朝早く牧場へ出るだらう、それで何時も妻君が赤坊をつれて行つて、籬の蔭へ寝かせておくだらう、さあ其處が私の見付處だて、お前明朝は夫婦と一緒に牧場へ行つて、その赤坊を懸命に番してゐる様なする顔をしておいでよ、何處へ私が不意に木蔭から躍り出て、態と赤坊を啣へて逃げるから、お前は喫驚したやうな風をして、私の後を追つて來るのだよ、そして私が二三分も走つて、最早よさそうな時分と思つたら、その赤坊を落して逃げるから、お前はそれを急いで主人夫婦の所へ連れて行くさ、左様すりや夫婦は屹度お前が赤坊を助けたのだと思ふから、殺すどころか、屹度今迄より大切に飼つて置くよ」と得意氣に教へました、犬もよい考へたと大層喜んで、明朝はその通りにしやうと心を極めました。翌朝何時の通り、牧羊者夫婦は牧場へ行き、籬の蔭に赤坊を寝せておきますと、森

の木蔭から一疋の狼が来て、不意に赤坊を啣へて逃げましたので、夫婦の者は狂氣のやうに叫喚き悶いてゐるばかりでした。犬は直ぐ追掛けて行つて赤坊を難なく啣へて來ましたから、夫は早速老犬の頭を軽く撫で、我が子を救つて呉れた恩に對しても、もう酷たらしい殺すなんといふ考へはフツツリと止め、妻は又女だけに喜びも夫よりは上で、其夜から古い座蒲團を敷いてやり、お旨しい物も澤山に食べさせて、可愛がつてやりました。これで先づ老犬の願ひは叶つたといふものです。すると其の後間もなく、狼が犬の處へまゐりまして、「ときに兄貴、私はお前の主人の飼つてゐる、あの脂肪ぎつた美味さうな羊を一疋窃と頂戴しやうと思ふが、その時お前は知らん顔して居なけりやいけないよ。主人にいらん告口なぞするときかないよ」と、一も二も無く承知することゝ思つて居ました。

ところが、案に相違して、老犬は眞面目に狼の顔をジツと見て、「いやだ、他ならん恩を受けたお前のお願ひだが、どうしても承知することは出来ないよ、私はお前

がそんな悪いことをすれば、無論主人に告げるよ」と、キツバリと斷りました。けれど、狼は犬の言葉を戲言だと思つて居ますから、少しも氣にかけません、或夜牧羊者の家の垣を破つて、羊を奪つて食はうと潜び込みました、然し牧羊者はその前犬に話をきいて、チャンと知つて居ますので、其夜も今夜あたり狼が來はせんかと、納屋の蔭に隠れて見張つて居ました。狼の方ではそんな事とは知らず、早くお旨しい御馳走に有附かうと、唇を掌擦りながら、ノソリノソリと足音を盗んで、納屋の方へまゐりますと、主人が蔭に立つて居て、手頃の棒を隠して持つてるをチラリと見ましたから、失錯つたと一目散に逃げ出しました。

狼は一目散に逃げながら、悔しまぎれに大きな聲で、「老耄犬の悪漢奴」と、犬を大層遺恨に思ひ、屹度敵を討つてやると、心に深く誓ひました。

よつて、狼は翌朝、猪を使者として犬の許にやり、昨夜の怨恨を晴らす爲め、森へ來て果合をせよと挑みました。老犬は狼に挑まれた以上行かぬ譯には參りません

が、力と頼む助太刀が御座いません、仕方がないので牧羊者の家に飼つてある、三本足の不具の猫に頼みました、猫も同じ家に居る犬に頼まれたのですから、大きに俵氣を出して引受け、犬と一緒に森を指して出掛けましたが、何分不具の事で、道を歩くに難澁ですから、尻尾をツンと棒のやうに上に立て、チンガリコ〜と行きました。森の中では狼と猪とが、犬の來るのを今か〜と待つて居ますと、遙か彼方から三本足の猫が、尻尾をツンと立て、來るのを見て刀を持つて居るのだと思ひ、チンガリ〜と跛を引くのを見て、自分等に投つける石を拾ふのだと思ひましたから、急に怖氣が出て當底かなはんと思ひ、猪は叢の中へ逃込み、狼は樹の上へ飛び上りました。

こちらは老犬と三本足の猫で御座います、漸くことで森の中に来て見ますと、疾く來て居る筈の狼と猪が居ませんので、不審に思つて四邊と見廻はして居ると、叢の中に隠れて居る猪が一寸と片方の耳を出して居るのを、猫が見附けてテツキリ

睨 鼠だと思ひ、いきなり躍りかゝつて咬みつぎ、爪でいやといふ程引掻きました。

猪は不意の攻撃に重傷を受け、苦しい鳴聲を上げて走りながら、「樹の上を見よ當の敵が居るから」と泡を喰つて逃げ去りました。

犬と猫は、猪が何をいふかと樹の上を仰いて見ますと、枝の間に狼が小さくなつて縮つて居ましたから、犬は狼が自分の悪るかつた事を耻ぢて、樹から降りて來さえずれば、決して悪くはせんと懇ろに説き聞かし、やがて狼と昨日迄のやうに、親しい交りを誓ひました。

〔解説〕狼に恩を受けながら、犬が其の悪い企圖を聞入れなんだのは、義といふ事を知つて居るからです、恩を返すには他に道があります、大切な義といふことを忘れ、主人の羊を狼に黙て奪らせたのでは何の役にも立ちません、この犬が狼の頼みを聞けば、狼も喜び、自分も恩を返すのだと思ふ人は、大きな心得違ひで

す、自分の生命を捨てないまでも自分を苦しめ、又は自分に損をして、恩を受けた人の爲めを思つてこそ初めて恩を知る人です、他人を苦しめ、他人に損をさしては、決して恩を知る人ではありません。

二五 大きな蕪

むかし、或る王様に仕へて居た兄弟の兵士がありました、兄は大層有福で、弟はまた至つて貧乏で御座いました。

そこで、弟も何か仕出かして、お錢をつくりたいと思立ちましたから、御奉公をやめて百姓になりました。

それで弟は、早速僅かばかりの地に蕪の種子をおろし、一生懸命に培養しました所が、多くの中に素敵もない大きな蕪が一つ出来まして、その大きくなるの、早いこと、申しましたら、宛然袋でも脹めていくやうで、それだけ大きくなるのら分らん位で

した、おしまひにはその一本だけでも、牛二頭牽きの荷車で、ヤツと曳けるか曳けん程でした、昔からこんな素敵もない大蕪は、見たことも聞いたこともなく、又これからとても二度と見るこの出来ん程の大ききさでした。

そこで、弟は蕪があまり大いので、こんな途方もないものを如何していいのやら、又お錢になるのやらならないのやら判断がつかまません、頻りにあゝか、かうかと考へて、こんな物を賣ればとて買者もなし、又食べればとて不味からうし、そうだ、一層のこと王様のお目にかけるが上分別と極めました。

そこで、エンヤラヤツと大蕪を荷車に積んで、王様に献上しました所、王様もアツとばかりに喫驚仰天なさいまして、「何といふ素敵もない大蕪だ、我も世に珍らしいといふ珍らしい物は澤山見たが、未だこんな魂消た物を見たことがない、何處からお前はその種子を手に入れた、それとも何かの拍子に出来たのか、それならお前は天下の仕合者だぞ」と仰せられましたから、弟は「噫、なんの王様、私が天下の仕合

者なぞとは飛んでもない、私にもその日の生計にも困つた、みじめな兵士でありましたが、到頭御奉公をよしまして、かくも見すばらしい百姓となつたので御座ります、私に一人有る福な兄がありますが、其の名は陛下も御存知なら、天下の人もみな存じて居ます、ところが私は御覽の通りの貧乏人で御座りますから、誰も存じて呉れる者はありません」とつゝ、申上げました。

王様は大層慈悲深いお方でありましたから、弟の身上話をお聞きになつて悠然でなりません、「もう今日から貧乏人ではないよ、お前の有る福な兄よりも、もつと有る福な身としてやらう」と、それは、有難いお言葉と共に、黄金やら、田地やら、その上羊まで澤山に未代迄の寶にせよと下し給はりましたから、有る福な兄とても、到底弟の身上には、比較することの出来ん身となりました。

是を聞き知つた兄は、羨ましいやら、妬ましいやらで堪りません、自分もひとつ王様の御恩賞にあづかりたいと、脳味噌を絞る程考へました揚句横手をうつて、弟

の奴は取るにも足らぬ燕一つで、あんなに大した下され物があつたとすると、一時立替ると思つて大金を出し、天下の名馬を購求めて献上したら、燕に下さつた御恩賞に數百倍して、乃公に並ぶ者なき御扶持が出るに相違ないと思ひましたので、國中の牧場を残らず尋ね、天下と名のあつた名馬を得て、早速王様に献上しました。

王様は兄の献上馬を、恭くお受取りになり、さて仰せあるには、「かゝる世に貴く珍らしい献上物に返禮するには、同じく珍らしい何時ぞやの燕より他にない」と、お側の衆に大勢して大燕を擔ぎ出させ、これを賜物として下さいました。

目算ガラリと外れた兄は、今更受取らぬ譯にはまゐりません、御苦勞様にも有難く頂戴し、牛二頭牽きの荷車に積み、エンヤラヤツと自分の家まで運込みました。

〔解説〕有るが上にも欲しがつて、この兄のやうに慾張ると、せんでもすむ耻を曝すのみか、損まで脊負はにやならぬ羽目になり、律義一邊で慾のない、この弟のやうに致しますと、思はぬ幸福を拾ふものです、それと同時に、人を謀らうと

致しますと、却つて人に謀られ易いものです。

二六 浮かれ胡弓

或る百姓の家に雇はれて居た作男が、三年間も牛か馬のやうに酷使はれましたが、鑑一文のお給金も呉れませんので、これでは到底やりきれんと思ひましたから、或る日のこと主人に、『旦那、私もお宅へ来てから、もう三年になります、随分骨身を惜まず働いた積です、つきましてはお給金を戴きたいもんですが』と申しますと、主人はまたお話にならん吝嗇坊のみでなく、この作男が遅鈍漢なのを知つて居ますから、たつた銅貨を三つ投げ出して、『さあ、これが三年間のお給金だよ』とやりました。

けれど、愠然な作男は、たつた銅貨三枚を大層なお錢だと思ひましたから、『もう此處で酷使はれて居ても、一生運達が上らない、こんな大金が手に入つたからに

や、今から所々方々を旅をして、うまい儲口でも捜すが上分別』と、銅貨を巾着の中へ大事に藏ひこみ、何處を當ともなくのこ〜と出掛けました。

この暢氣男がぶらりと野原に差しかつた時、向ふの方から一人の一寸法師がやつて来て、『大層な御機嫌です』と聲をかけましたから、作男先生大得意で、『へン、これが鬱いで居られるかい、身體はこんな達者だし、懐中には素敵もないお錢を持つて居るしさ、何を不足がいられるもんか、全體私が途方もない大枚のお錢を持つてるなあ、三年もかゝつてやつと給金に貰つたのさ』と、大金持にでもなつたやうな大變なお得意なので、一寸法師は感心した顔で『左様ですか、そして如何程お持ちなのです』と申しますと、作男は一段と愉快さうに、『銅貨をしかも三枚さ』と、天にでも登つたやうな心持。

一寸法師は憐れつぽい聲で、『旦那、私はお見掛け通り、其の日にも窮る貧乏人で御座ります、何んと甚だ申し難ねましたが、其のお錢を下さる譯にはまわりま

るか』と只管願ひますので、根が性の善い作男は急に氣の毒になり、虎の子のやうに大事に藏つておいた巾着のお錢を、惜氣もなくやつてしまひました。

すると一寸法師は世にも嬉し氣に、『まあ御親切な方があればあるものだ、お蔭で貧乏人が助かります、其の代りお禮と申しては失禮ですが、何なりとあなたの望を三つ叶へませう』と申しますので、作男も殊の外喜んで、『そいつは何より有難い、先づ何でも射落とせる弓と、誰れでも夢中に浮かれて踊り出す胡弓と、自分が願ふことは何でも叶ふお呪禁と、かう三つを叶へてもらひたいものだ』と勝手な事を並べましたら、一寸法師は心好く、早速術を使つて望み通りに弓と胡弓とを渡し、お呪禁の仕方も教へて、何處ともなく行つてしまひました。

一文なしの正直男は、三つの望みが叶つたので、以前よりも勇んで行手を急ぎますと、向ふに一本の樹があつて、その下に一人の猶太人が、綺麗な小鳥が枝に棲つて、それはく美しい聲で囀つて居るのを見上げ、欲しさうに立つて居るのに出遇

ひました。

猶太人は向ふから人の來るのを見て、『まあ何といふ綺麗な美しい聲の鳥だらう、捕つてくれる人があつたら、幾干でもお錢をやるがなあ』と、態と聞わよがしに申しますと、作男は心の中で占めたと思つて、首尾能くまるるやうにとお呪禁をつかひながら、猶太人の側にやつて来て、『をい、本當にお錢を呉れるなら捕つてやらうか』と申しますと、猶太人は欲しいのが一ぱいで、是非捕つて呉れと頼みました。そこで、背中から弓をおろして、枝を狙つてヒエウと射ると、棲つて居た小鳥はばたくと鼓翼して、所もあらうに、樹の周圍に一面に茂つて居た茨の中に落ちました。

猶太人は占めたと、周章て小鳥を捕へようと茨の中に跳び込みますと、作男は此處だと手早く胡弓を取出しキユ〜〜〜擦り初めました。

胡弓の音が鳴り出すと、不思議や猶太人は急に浮かれ出し、身體を曲げたり飛び上

つたり、妙な手付で踊りましたが、何がさて刺だらけの茨の中のことですから、見る／＼着物は引裂かれる、手足は引搔かれて血だらけになつたので、『助けて呉れ、助けて呉れ、胡弓の手を止めてくれ、己に何にも罪はないじやないか』と喚きました。作男は猶太人といふ奴は、世界中で一番の吝嗇坊で、又酷い奴だと聞いて居ますので、『何の罪がないものか、貧乏人を澤山虐た罰なんだ』と、殊更胡弓の手を早めました。胡弓の曲が早まるにつれ、猶太人はいよく浮かれて踊りだし、傷だらけになつて痛くて堪へられませんか、泣聲を絞つて、『お錢を出すから止めてくれ』と申しましたので、作男は待つて居たと云はぬばかりに、『そんなら、幾何出す』一圓々々、『否な事だい』五圓出す』『馬鹿を云つてらあ』拾圓まで迫上げた』『巫山戯るない』『あゝそんなら二十圓』『まだ』『ずつと飛んで五十圓』『何うして』『あ痛た……ヒヤ／＼百圓』『少し足りないが減けてやる』と胡弓の手を止めましたので、猶太人は茨の中から、貧乏人を絞り取つた百圓のお金を投げ出しました、作

男はにこ／＼顔で其を巾着にしつかり藏込み、ぶらり／＼と出掛けました。

茨の中から着物を引裂かれ、血だらけになつて、やつと這ひ出した猶太人は、残念で／＼たまりません、早速お役所に馳込んで、追剥の爲めに有金残らず奪れたのみか、こんな酷い目に遇はされました、そして其の追剥の奴は、背中に弓を背負ひまして、首に胡弓を懸けた奴ですと訴へましたから、役人はそれつと數多の追手を出し、驚き騒ぐ作男を難なく搦取つてまゐりました。

お役人は二人を白洲に座らせて糺しますと、猶太人は此奴が途中で私を打つやら蹴るやら辛い目に遇せて、金を奪つたのだと憐つぽく申立てますので、作男は『どうして／＼、その金は私が胡弓を鳴らしたお禮に受取りました』と申開きましたが、お役人は作男をハツタと睨め、『盗人猛々しいとは汝のことだ』と有無を言はず、絞架へと引立てました。

作男はいよ／＼絞架へ乗らうとした時、お役人に『今生の名残に、たつた一つ願ひ

をお聞届け下さいませんかと申しますと、『生命を助けて呉れといふのでなければ、随分聞届けんものでもない』『否々、此場に及んで生命などは決して惜みません、唯胡弓をひかして下さらばそれで澤山です』とまた他意なき有様。

胡弓と聞いた猶太人は喫驚して、『お役人様、彼奴に胡弓をひかしたら、そ……それ、それは大變です』と申しますので、作男は『大事と例のお呪禁を一心不亂に口の中へ唱へましたら、お役人は早速、『何より易い願ひと』苦もなく許可しました。

占めたと作男は、胡弓をキュウ〜鳴らして出しますと、お役人や、牢番や、猶太人が急に浮かれ出し、前後夢中にスタコラ〜踊り出しますのみか、お刑を見やうと絞架の周圍に集まつた人達までが、同じやうに踊り出して、宛然癡狂病院の内へでも入つたやう。

作男は此處を先途と引きたてますと、みんな躍り疲れてへど〜になり、免して呉れ〜と頼みましたがあな〜聞入れません、益々手を早めて絃を擦り立てまし

たので、到頭お役人も半死半生の躰になり、この男の生命を赦免すのみか、先に取上げた百圓のお金も返してやると言ひ渡しましたが、作男はな〜胡弓の手を止めません、唯少しばかり手を弛めたのみでした。

お役人は少し身体が楽になり、苦しい氣息をホツとつきながら猶太人に、『ささまが下らん訴を持出したばかりに、已様まで飛んだ目に遇つた、全體その百圓の金は何處から持つて来たんだ』と糺しますと、猶太人が多くの人から無理非道に取立てた金だと分りましたので、自分が却つて絞架に上る身となりました。

そこで作男は、左もこそと言はぬばかりに、胡弓を鳴らしながら、暢氣に何處へか行つてしまひました。

〔解説〕作男は少し悪戯が過ぎましたが、根が人を憐む無慾な性の男でしたから、いろ〜幸福がまゐりました、猶太人は吝嗇坊の性ですから、日頃の無理非道な報が来て、首を斬られるやうな罰が来たのです。

二七 兎のお嫁さん

お母さんが、一人の娘と菜畑の中へ家を建て、住んで居ましたが、何處から来るのか一疋の兎が、折角見事にできた菜を喰ひ荒らすので、娘に、『お前御苦勞だが、畑へ行つて兎を追つて来てお呉れよ』と吩听けました。

娘は早速畑へ出て見ると、何時ものやうに兎が菜を食べて居ますので、『シツ、シツ、菜をみんな食べてしまつてはいけないよ』と叱りますと、兎は一向平氣の平左衛門で、『これは〜お嬢さん、私の尻尾に乗つて兎の家へお出でになりませんか』と申しましたが、言ふ迄もなく娘はそんな言なぞきません。

すると又二三日過ぎると、例の兎がやつて来て菜畑を荒らして居ますので、お母さんが又娘に、『お前御苦勞だが、畑へ行つて兎を追つて来てお呉れよ』と吩听けましたので、娘は畑へ来て、『シツ、シツ、菜をみんな食べてしまつてはいけないよ』

と叱りましたが、兎は知らん顔で、『これは〜お嬢さん、私の尻尾に乗つて兎の家へお出でになりませんか』と先達と同じ言を繰返しました、そして娘も又耳にも入れませんでした。

又二三日過ぎると、兎が菜畑を荒らしに来て居ますので、お母さんが何時のやうに『お前御苦勞だが、畑へ行つて兎を追つて来てお呉れよ』と吩听けましたので、娘も又畑へ来て、『シツ、シツ、菜をみんな食べてしまつてはいけないよ』と叱りますと、兎は一向そんなことに頓着なく、『これは〜お嬢さん、私の尻尾に乗つて兎の家へお出でになりませんか』と例の洒々した挨拶。

娘も兎があんまり何度も〜申しますので、つい何んな家が見たい氣になり、恐々尻尾に乗りますと、兎は占めたと一目散に駆け出しました。

程なく兎の家につきまますと、尻尾から娘をビヨイと卸して、『さあ〜今日から私のお嫁さんだ、菜葉や糠の御馳走を澤山こしらへて下さい、私はこれから親戚やお

友達をみんな伴れて来るから』と申しましたので、娘は始めて欺されたと知り、悔しひやら、悲しひやらで、ワツと其場に泣き伏しました。

兎は大事のく、花嫁さんに泣かれるので、おご／＼しながら娘の顔をさし覗き、
『機嫌を直して起きて下さいよ、お客様を澤山お招きするんじゃないか』といろいろ賺しましたが、たいさめ／＼と泣くばかりで無言の躰、

兎も仕方がないので、今に機嫌が直るであらう、急ぐことでもないで用達に出掛けて歸つて来て見ると、まだ花嫁さんは泣沈んで居ますので、『機嫌を直して起きて下さいよ、お客様を澤山お招きするんじゃないか』と優しく慰めても、相變らず泣くばかりなので、又氣を取直して、『これこの暇にお客様でも伴れて来やう』と出て行きました。

兎の出て行つたのを見た娘は、急に起き上りまして、そこらに撒らばつて居る藁をかき集め、手際よく人形を作つて自分の着物をさせ、目鼻も口もそつくりつけて

臺所に立たせ、ソツとお母さんの許に逃げ歸りました。

程なくいそ／＼と歸つて来た兎は、お嫁さんが機嫌を直して、臺所で御馳走を拵へて居ると思つたので喜しくてたまりません、『を、よく起きて呉れた』と夢中になつて後から觸りますと、もど／＼藁人形のことですから、バタリと倒れてグウともスウともいはんのみか、ビクリとも動きません。

そつつかしい兎は、自分の觸り所が悪かつたので、テツキリお嫁さんを殺したのだと思ひましたから、楽しい御婚禮も、お旨しい御馳走も水の泡となり、スツカリ鬱いでしまいました。

〔解説〕取るにも足らん小さな獸の癖に、人間を欺さうとした兎の罰は當前です、それも自分の危いのを免かれやうとかなら、未だしもですが、分不相應な慾を起したので、失敗せなんだら不思議位です、總て人を欺したと喜んで居ると、却つて自分が欺されて居るやうな事が多いですから、何でも正直で、分不

相應な慾を起さないのが一番安全です。

二八 呆助さん

或る日お母さんが一人息子の呆助に、

母「呆助、今日は何處へ行くの。」

呆「おばさんの家へ行つて來ます。」

母「ごんでもない失策を仕出來して、笑はれないやうにおしよ。」

呆「大丈夫、御心配はいりません、ちやお母さん行つて來ます。」

母「はい左様なら。」

呆助さんはおばさんの家へまゐりまして、

呆「おばさん、お早う。」

おば「呆助さんお早う、何か今日は好い物でも持つて來てお呉れなかい。」

呆「何にも持つて來ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。」

そこで、おばさんは一本の縫針を呆助に渡して。

おば「左様なら呆助さん、又おいでよ。」

呆助は縫針を貰ひましたが、どうして持つて歸らうと困つて居ますと、丁度其處を乾草を澤山積んだ荷車が通りましたので、早速その乾草に針を刺し、テク／＼車の後からついて家へ戻りました。

呆「お母さん、唯今。」

母「を、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。」

呆「おばさんの家に。」

母「何か持つて行つたかい。」

呆「何にも持つて行かなかつたが、私はおばさんの家から持つて來たの。」

母「おばさんは何を呉れたつたい。」

呆 縫針を一本呉れたのだけれど、道で失くしてしまつたの。」

母「お前その針をどうして持つて歸つたの。」

呆「荷車に山ほど積んだ乾草に刺して來たの。」

母「そんな馬鹿がありますか、袖口へでも刺して來れば、失くしたくても失くせれないのに。」

呆「あゝわかつた、今度から氣を付けますよ。」

或る日又お母さんが呆助に、

母「呆助、今日は何處へ行くの。」

呆「おばさんの家へ行つて來ます。」

母「とんでもない失策を仕出來して、笑はれないやうにおしよ。」

呆「大丈夫、御心配はいりません、ぢやお母さん行つて來ます。」

母「はい左様なら。」

呆助さんはおばさんの家へまゐりまして、

呆「おばさん、お早う。」

おば「呆助さんお早う、何か今日は好い物でも持つて來てお呉れなのかい。」

呆「何にも持つて來ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。」

そこで、おばさんは一挺の小刀を呆助に渡して、

おば「左様なら呆助さん、又おいでよ。」

呆助は早速小刀を袖口に突刺して、得意になつて家へ戻りました。

呆「お母さん、唯今。」

母「を、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。」

呆「おばさんの家に。」

母「何か持つて行つたかい。」

呆「何にも持つて行かなかつたが、私はおばさんの家から持つて來たの。」

母「おばさんは何をお呉れだつたい。」

呆「小刀を一挺呉れたの、だけれど道で失くしてしまつたの。」

母「お前その小刀をどうして持つて歸つたの。」

呆「袖口の所へ突刺して。」

母「そんな馬鹿がありますか、衣囊へでも入れて来れば、失くしたくても失くせられないのに。」

呆「あゝわかつた、今度から氣を付けますよ。」

或る日又お母さんが呆助に、

母「呆助、今日は何處へ行くの。」

呆「おばさんの家へ行つて来ます。」

母「そんなでもない失策を仕出来して、笑はれないやうにおしよ。」

呆「大丈夫、御心配はいりません、ぢやお母さん行つて来ます。」

母「はい左様なら。」

呆助さんはおばさんの家へまゐりまして、

呆「おばさん、お早う。」

おば「呆助さんお早う、何か今日は好い物でも持つて来てお呉れなかい。」

呆「何にも持つて来ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。」

そこで、おばさんは一疋の生れたばかりの山羊を呆助に渡して、

おば「左様なら呆助さん、又おいでよ。」

呆助は早速小山羊の四足を一緒に縛つて、無理無體に衣囊へ振込みましたから、家へ戻つたら山羊の仔は、息が詰まつて死んで居ました。

呆「お母さん、唯今。」

母「を、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。」

呆「おばさんの家に。」

母「何か持つて行つたかい。」

呆「何にも持つて行かなかつたが、私はおばさんの家から持つて来たの。」

母「おばさんは何を呉れたつたい。」

呆「生はたばつかりの山羊を一疋呉れたの、だけれど道で死んでしまったの。」

母「お前その小山羊をどうして持つて歸つたの。」

呆「衣囊の内へ入れて。」

母「そんな馬鹿がありますか、頸へ繩を縛つて伴れて来れば、殺したくても死な、

いのに。」

呆「あゝわかつた、今度から氣をつけますよ。」

或る日又お母さんが呆助に、

母「呆助、今日は何處へ行くの。」

呆「おばさんの家へ行つて来ます。」

母「とんでもない失策を仕出かして、笑はれないやうにおしよ。」

呆「大丈夫、御心配はいりません、ちやお母さん行つて来ます。」

母「はい左様なら。」

呆助さんはおばさんの家へまゐりまして、

呆「おばさん、お早う。」

おば「呆助さんお早う、何か今日は好い物でも持つて来てお呉れなかい。」

呆「何にも持つて来ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。」

そこで、おばさんは鹽漬の豚肉を一切呆助に渡して、

おば「左様なら呆助さん、又おいでよ。」

呆助は早速豚肉を繩で括げてするゝ引摺つて歸りますと、野良犬がその後から

ついて来て、これは御馳走様とも何ともいはずに喰べてしまひましたから、家へ戻

つて見たら繩切が手に残つて居るばかりでした。

呆「お母さん、唯今。」

母「を、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。」

呆「おばさんの家に。」

母「何か持つて行つたかい。」

呆「何にも持つて行かなかつたが、私はおばさんの家から持つて來たの。」

母「おばさんは何をお呉れだつたの。」

呆「鹽豚を一切呉れたの、だけれど道で犬に喰はれてしまつたの。」

母「お前その鹽豚をどうして持つて歸つたの。」

呆「繩で括げて引摺つて。」

母「そんな馬鹿がありますか、頭の上へ載せて來れば、犬に食べ

られないのに。」

呆「あゝわかつた、今度から氣をつけますよ。」

或る日又お母さんが呆助に、

母「呆助、今日は何處へ行くの。」

呆「おばさんの家へ行つて來ます。」

母「とんでもない失策を仕出來して、笑はれないやうにおしよ。」

呆「大丈夫、御心配はいりません、ぢやお母さん行つて來ます。」

母「はい左様なら。」

呆助さんはおばさんの家へまゐりまして。

呆「おばさん、お早う。」

おば「呆助さん、お早う何か今日は好い物でも持つて來てお呉れなかい。」

呆「何にも持つて來ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。」

そこで、おばさんは轆を一疋呆助に渡して、

おば「左様なら呆助さん、又おいでよ。」

呆助は早速犢の重いのを耐へて頭の上に載せ、汗をたら／＼滴しながら歸りますと、犢は呆助の頭や顔を一面に引搔いて傷だらけにしました。

呆「お母さん、唯今。」

母「を、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。」

呆「おばさんの家に。」

母「何か持つて行つたかい。」

呆「何にも持つて行かなかつたが、私はおばさんの家から持つて來たの。」

母「おばさんは何をお呉れだつたい。」

呆「犢を一疋呉れたの。」

母「お前その犢をどうして持つて歸つたの。」

呆「頭の上へ載せて來たら、こんなに引搔／＼れて傷だらけにされたの。」

母「そんな馬鹿がありますか、秣槽に括りつけて槽ともに引摺つて來れば、引搔／＼

れたくても引搔／＼れないのに。」

呆「あゝわかつた、今度から氣をつけますよ。」

或る日又お母さんが呆助に、

母「呆助、今日は何處へ行くの。」

呆「おばさんの家へ行つて來ます。」

母「とんでもない失策を仕出來して、笑はれないやうにおしよ。」

呆「大丈夫、御心配はいりません、ちやお母さん行つて來ます。」

母「はい左様なら。」

呆助さんはおばさんの家へまゐりまして。

呆「おばさん、お早う。」

おば「呆助さんお早う、何か今日は好い物でも持つて來てお呉れなのか。」

呆「何にも持つて來ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。」

そこで、おばさんは、

おば「今日は何にもあげる物が無いから、私を連れて行つてお呉れよ。」

呆助は早速おばさんの首を縄で縛り、秣槽に括りつけてごろ／＼戻つて来ました

呆「お母さん、唯今。」

母「を、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。」

呆「おばさんの家に。」

母「何か持つて行つたかい。」

呆「何にも持つて行かないの。」

母「おばさんは何をお呉れだつたかい。」

呆「何にも呉れないの、だが今日はおばさんが来たの。」

母「を、さうか、そしておばさんのお供をして来たらうね。」

母「お供をして来ましたとも、おばさんの首を縄で縛つて、秣槽に括りつけて、力

一ぱい忌嫌るのを引張つて来ましたいもの。」

戸の外で聞いて居たおばさんも、到頭ぶん／＼に怒つてしまひ、二度と呆助を自

分の家へよせつけませんでした。

〔解説〕こんな馬鹿者も澤山ありますまいが、總て海綿が水を吸つて吐き出すやうに、

智恵も教はつたまゝ吐き出して、應用するといふことがなくては駄目です、昔

から賢い人のことを、一を聞いて十を知るといふ如く、一つの智恵を何にでも

應用することを心掛けねばなりません。

二九 蜘蛛と蚤

蜘蛛と蚤とが一緒に住んで居ましたが、鶏卵の殻にお旨いお酒を醸して、何よ

りの樂みとしてゐました。

或る日蜘蛛が鶏卵の殻に這ひ上つて、お酒を造らうとサツサと働いて居ましたが、

何ういふ機勢か足を滑らして轉り落ち、大火傷を致しました。蚤はお友達の災難を見ておい／＼大聲で泣いて居ますと、側に立つて居た雨戸が、「蚤さん、何をそんなに悲しさに泣くんだい」と尋ねましたから、蚤は泣顔を上げて、「お友達の蜘蛛が大火傷したんだもの、これが泣かずに居られますものか」と泣きしやくる有様。

雨戸も聞いて急に悲くなり、軋々と泣いて居ますと、隅に凭れて居た箒が、「雨戸さん、何をそんなに軋むんだい」と尋ねましたから、雨戸は

小さな蜘蛛が火傷して

蚤はおい／＼泣き出すし

とうたひながら、「これが軋まずに居られますものか」と答へました。箒も聞いて急に悲くなり、がさ／＼音をさして泣いて居ますと、其處を通り過ぎた小さな荷車が、「箒さん、何をそんなにがさ／＼音を立てるんだい」と尋ねましたから、箒は

小さな蜘蛛が火傷して

蚤はおい／＼泣き出すし

雨戸は軋々動き出す

とうたひながら、「これががさ／＼せずに居られますものか」と答へました。

荷車も聞いて急に悲くなり、貫泣きに轟々廻つて泣いて居ますと、側に堆く積んであつた灰が、「荷車さん、何をそんなに轟々廻つて居るんだい」と尋ねましたから、

荷車は

小さな蜘蛛が火傷して

蚤はおい／＼泣き出すし

雨戸は軋々動き出し

箒はがさ／＼音を立つ

とうたひながら、「これが轟々廻らんで居られますものか」と答へました。

灰も聞いて急に悲くなり、バツと一時に燃え出しますと、其處に植えてあつた樹が「灰さん、何をそんなにバツと燃え出すんだい」と尋ねましたから、灰は

小さな蜘蛛が火傷して

蚤はおい〜泣き出すし

雨戸は軋々動き出し

箒はがさ〜音を立て

車は轟々廻り出す

とうたひながら、「これがバツと燃え込んで居られますものか」と答へました。

樹も聞いて急に悲くなり、ぶる〜と幹を震はして葉を振り落して居ますと、壺

を持つて水を汲みに出た小娘が、「樹さん、何をそんなにぶる〜幹を震はして葉を

落すんだい」と尋ねましたから、樹は、

小さな蜘蛛が火傷して

蚤はおい〜泣き出すし

雨戸は軋々動き出し

箒はがさ〜音を立て

車は轟々廻り出し

灰は一時にバツと燃ゆ

とうたひながら、「これがぶる〜震はずに居られますものか」と答へました。

小娘も聞いて急に悲くなり、手に持つて居た壺をいきなり地に投付けて砕いてし

まひますと、小娘が水を汲まふとした小河が、「お嬢さん、何をそんなに短氣に壺を

砕くんです」と尋ねましたから、小娘は、

小さな蜘蛛が火傷して

蚤はおい〜泣き出すし

雨戸は軋々動き出し

箒はがさ／＼音を立て

車は轟々廻り出し

灰は一時にバツと燃え

樹はふる／＼と葉を振り落す

こんどは私の番なのよ

どうたひながら、「これが壺なんか砕かないで居られるものか」と答へました。

小河は聞いて「あ」と溜息をつき、「私もセッセと渦を巻ねば居られません」と

いひながら、ぐる／＼輪のやうに廻るに従がい、追々水勢は強くなり、水嵩は段々

と増して来て、見る／＼内に蠶が桑の葉でも食べるやうに、小娘も、樹も、灰も、

荷車も、箒も、兩戸も、蚤も、蜘蛛も沈んでいつて、到頭一面の水になつてしまひ

ました。

〔解説〕よく赤坊が自分は上機嫌で居ても、他の兒が泣くのを見ておい／＼と貰泣き

をするやうに、一家の内でも善い人があれば皆善い人になり、悪い人があれば皆悪い人になり、到頭一家残らず同化されるものです、それと同じで、一人が樂しめば他の者も喜しくなり、一人が悲めば他の者も泣きたくなります、故に皆の者が善い人で、心を快活に持つより確かなことはありません。

三〇 奇妙な鳥

むかし、或る所に、魔法使の男が住んで居て、穢い乞食の形に姿をやつし、人の軒先に食物やお錢を貰ふやうな風をして、若い娘をさらつて逃げるのを商買のやうにいたしました。誰もこの恐ろしい魔法使ひが何處から來るのか、何處へさらつて逃げるのか、知る人は御座いませんでした。

或る日、魔法使はよぼ／＼した髯の爺さんに化つて、戴き物を入れる大きな囊を脊負ひ、三人の美しいお嬢さんのある家の軒先に立ちました。

壁の爺さんは世に哀れげな聲を出し、「ごうぞ、おあまりでもありませんたら、不憫な不具者にやつて下さい」と申しますと、一番姉のお嬢さんが、麩包の切片をやらうと差出した其の手に爺さんが一寸と觸れますと、不思議やお嬢さんの身體は、螺旋仕掛の人形のやうに、ピヨイと脊中の囊の中に入つてしまつて、腕いても喚いても最早駄目です。

壁の爺さんになつて居た魔法使は、占めたつと囊を脊負つたまゝ、颯風のやうに、眞闇な森の中の住家に歸りました。

囊の中から出された年上のお嬢さんは、泣腫らした眼ををづく／＼上げて見ますと、家は大層廣いばかりか、美しい物やお旨い物が澤山御座います。魔法使はお嬢さんの好きな物は何んでも惜まず與へて、借申しますには、「此處にあるもので宜しくば、あなたの好きなやうになさい、私は二日ばかり旅に出なけりやならんから、少しの間お留守を願ひます、こゝに家中の鍵があるから、これでお好み次第何處でも開けて

見てもよろしいが、この一番小さな鍵の嵌る部屋だけは、手を付けてはなりません。もし私の言葉に負くと、死ぬやうな目に遇ひますぞ」と、堅く言ひ呷めて多くの鍵を渡し、別に一つの卵を取出して、「これは随分氣を付けて下さいよ、もしなくなつたり割れたりするといけないから、夜でも晝でも身體から離してはいけません、萬が一にも間違ひがあると、どんな辛い目を見るか分りませんよ」と、卵をも渡しました。

お嬢さんは、「決してあなたの言葉を負きません」と立派に誓ひましたが、その預つた鍵を手にして部屋々を見廻はり、二階から穴藏まで行き盡くしました時、どうも恐いもの見たさは誰しもの癖で、堅く止められた部屋が見たくて／＼たまりません、別段見ても滅る譯もないから、誰にも見つからなければ大丈夫と、その部屋の鑰をカチリと外して入りましたが、お嬢さんはアツといつた限り、暫時は言葉も出ず身震いたしました。

お嬢さんが喫驚して身震したも道理、部屋の中に大きな鉢がありまして、其の中に真赤の血がなみくと盛つてありました、お嬢さんは其の澤山な血も、みんな自分のやうに掠めて伴れて來られた者の血に相違ないと思付きました時、今更ながら胸震ひした機勢に、手に持つて居た大切の卵がボトリと鉢の中へ落ちました、アツと思つて手早く拾ひ上げて、真赤に染つた血を、いくら洗つても、擦つても、拭いても、もとのやうにはなりませんでした。

翌日魔法使は旅から歸つて來て、お嬢さんに預けた鍵と卵とを渡せと申しました、お嬢さんは今更隠す譯にはいきませんから、真青な顔になり、ぶる／＼震へながら渡しますと、魔法使は卵が血で真赤に染まつて居るのを見て、『あなたは、私がある程見てはいけないと言つた部屋を開けましたな、最早あなたの生命はこれ限だ』と屹といひながら、お嬢さんの髪をムツと掴んで引摺りゆき、泣くのも佯びるのも耳にかけず、例の血を盛つた大きな鉢のある部屋に押込めて、ピシンと錠を下しま

した。

『こん度は次のお嬢さんを捉へて來よう』と、魔法使はニヤ／＼笑ひながら、例の乞食姿に身をやつし、大袋を脊負つて以前の家の前に立ち、憐れつぽい聲で乞ひますと、次のお嬢さんが何心なく、又麩包の切片をやらうと出て來ましたから、其の手に一寸觸れて袋の中へ入れ、サツサと家に歸つて來て、又例の鍵と卵とを預けて旅に出ました。

ところが、このお嬢さんも姉さんのやうに、かたく止められた部屋が見たくてたまらず、到頭錠を外して内へ入りましたから、又卵を鉢の中に落とし、魔法使が歸つてから、同じやうに押込められてしまひました。

『こん度は末のお嬢さんを捉へて來よう』と、魔法使はまた二人の姉さんと同じ手段で、末の娘を自分の家に伴れてまゐり、例の鍵と卵とを預けて旅に出ました。

ところが、このお嬢さんはなかく利發で用心深く御座いましたから、預かつた

卵を大切に落さぬやうに下へ置き、どんな事があらうとも吃驚すまると心を落付け、静かに止められた部屋を開けて見ますと、まあ驚くでは御座いませんか、行方の知れなんだ二人の姉さんか重なり合ひ、餓死しか、つて虫の息で居ました。

末のお嬢さんは姉さん思ひですから、眞赤な血が溢れる程盛つてある鉢を見るよりも、大層二人の身を案じて早速扶け起し、食物を上げたり、水を飲ましたり、ろ手を盡して介抱しましたから、姉さん達も程なく身體に勢が出て、三人泣いたり抱き合つたりして喜びました。

程なく魔法使が歸つて来て、預けた鍵と卵とを返せと申しますから、末のお嬢さんは平氣な顔で渡しますと。卵はもとの儘で少しも血の痕がありませんから、『よく言付を無にしませんでした、あなたを私のお嫁さんにしますから、ごんな頼みでも言ふがい、御望み次第に叶へて上げると、にこ／＼しながら申しました。

お嬢さんは心の内で占めたつと喜んで、『そんなら、あなたの脊中の袋へ、一坏お金を詰め込んで、私の親の家へ御苦勞様だか、あなた御自身で運んで下さい、私は其の隙間にお婚禮の仕度をして置きますから』と、誠しやかに頼みました。

魔法使は早速承知して、少し身體を休めて居ます間に、お嬢さんは姉さんは二人を匿しておいた部屋に飛んで来て、『さあ／＼姉さん、家へ歸れる時が來ましたよ、魔法使に脊負はしてやるんですよ、其代り姉さん達が家へお歸りなすつたら、早く救ひの者をよこして下さいよ』と、言葉もそこ／＼二人を大袋の中に入れ、上の方だけばら／＼とお金を撒き散らし、何んにも知らん魔法使の後ろから脊負はして、『さあ袋に一ぱいお金を詰めましたよ、早く私の親の家まで届けて下さい、途中であなた休んでは遅れますよ、私はチャンと窓から見てゐますから』

魔法使は、このお嬢さんを自分のお嫁さんにするのが喜しさに、言はれる儘に少しも疑はず、エンヤラヤツと袋を脊負ひましたが、何分二人も入つて居るのですから、重い何んのつて御話になりません、額から汗をたら／＼流し、はあ／＼苦し

い氣息をして、ヤツと一二町歩きますうちに、脊骨が碎ける程重いので、一寸休まうと立ち止まりますと、袋の内から、『私が窓からチャンと見て居ますよ、アラ休んではいけないじやありませんか、サツサと行つて下さいよ』と聲がします。

けれど魔法使はテツキリ窓から覗いて居るといつた、お嫁さんの聲どしか思まひせんから、南無三休むのを見られちや大變と喫驚して、又エツチラオツチラ歩き出しました、我慢にも辛抱が出来ませんので、又樹の根へソツと腰掛けやうとすると、『私が窓からチャンと見て居ますよ、アラ休んではいけないじやありませんか、サツサと行つて下さいよ』と聲がします。窓から此處まで見るとは恐ろしい限だと、魔法使は休むことも出来ず、泣顔しながらエンヤラヤツと袋を三人の家の軒下へソツと置き、楽しい我が家へと疲れし足を向けました。

こちらは末のお嬢さんで御座います、お婚禮の御馳走をスツクリ仕度してしまひ、魔法使ひの友達にも残らず招待状を出した後、人の顔程ある大きな蕪に眼鼻

や口を上手に書き、頭の飾りもスツクリ作つて窓に凭せかけ、自分が覗いて居るやうに見せかけて置きました。

スツカリ用意が出来上つて後、お嬢さんは先づこれで善しと、今度は蜂蜜の詰めである桶に身體を漬け、蒲團を解して中に入れてあつた鳥の羽根の上をごろ／＼と轉りましたから、蜂蜜の粘りへ透間なく羽根が貼付いて、大きな奇妙な鳥といふ外、人間とは誰が見ても思はれませんでした。

奇妙な鳥に姿を變へたお嬢さんは、家を出て路傍に立つて居ますと、先に出した招待状を見て集まつて来る魔法使のお友達が、未だ見たこともない大きな鳥が居るのを見て、『全體お前は何處からお出でだ』と、怪訝な顔をして尋ねますと、お嬢さんは可笑さを耐へて、『私は鳥の王様の御殿からまゐりました』と答へました、すると又お友達が、『今日の花嫁さんは如何なさいまし』と申しますと、『あれ彼處を御覽なされ、窓から皆様を覗いて居られます』と答へましたので、お友達は蕪を見て花嫁

さんと思ひ、家の方へ急いでまゐりました。

花婿の魔法使は、疲勞足を引摺つて漸やく我家の近くまで來ますと、又大きな奇妙な鳥が立つて居るので、お友達と同じやうに尋ねますと、同じやうに答へられましたから、窓に載つてる蕪をテツキリお嫁さんだと思込み、急に元氣を出してスタスタと家へ入りました。

ところが、二人の姉さんの報知により、喫驚して馳せ來た村の人々は、魔法使や其のお友達がお、スツカリ家へ入つた時到着しましたので、急に家中の戸や窓は無論のこと、少しの隙間もなく外から塞いで、火を放ちましたから、悪い者等は狼狽へて、キヤツキヤツと泣き喚きましたか仕方ありません、見る／＼内にみんな焼死んで灰になつてしまひました。

〔解説〕末のお嬢さんが自分の生命も助かり、二人の姉さんまで救ひ出したのは、全く人に優れた智恵と度胸とがあつたからです、皆さんも、能く勉強して智恵を

研かねばなりませんと同時に、ごんな心配なことや、恐いことが出來てもビクともせず、靜かに度胸を据ゐてかゝる様になければなりません。

新譯 解説
グリムお伽噺 終



明治四十三年九月十五日印刷
明治四十三年九月二十日發行

クリームお伽噺
定價金三十五錢

不許
複製

譯者 近藤敏三郎
東京市神田區多町一丁目十五番地
發行者 長谷川好太郎
東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地
印刷者 今井鐵次郎

發行所
發行所

東京市神田區多町一丁目十五番地
振替口座四九二八番 精華堂書店
大阪市南區安堂寺町心齋橋筋西入
振替口座四八四一番 精華堂書店

9
20

文學士 近藤敏三郎先生纂譯

ドン・キホーテ物語

全 一 冊
定價金三十五錢
郵税金四錢

ドン・キホーテ物語は最も弘く西洋各國に愛讀せられたる書、世界三大奇書の一として何人も一度は本書を繙かざるなし、讀み去り讀み來りて一節は一節よりも面白く、滑稽談陸續々として出で來る、讀者が卷の終るも知らず一氣に讀み了らんとすは、主人公主従が馬と驢馬との足搔の續く限り、所々を遍歴せんとするに同じからん、加ふるに譯者が毫も艱澁の痕なき明快の文章は、原著書が奇想天外より落ち來りて人の願を解かしむるの妙を傳へて遺憾なし、辛き世に腹を抱けて笑ひたき人は、速かに一冊を購ひて繙き給へといふ。

發行所

東京市神田區多町一丁目十五番地 **精華堂書店**
振替 口座 四九二八番
大阪市南區安堂寺町心齋橋筋西入 **精華堂書店**
振替 口座 四八四一番

9
20

9A
269

CO
2

SI

9.

5 2

98
269

